寝台特急「紀伊」殺人行

Kyōtarō Nishimura

西村京太郎

中公文庫

中公文庫

寝台特急「紀伊」殺人行

定価はカバーに表示してあります。

1997年9月3日印刷
1997年9月18日発行

著　者　西村京太郎

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Kyotaro Nishimura

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202934-1　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

寝台特急「紀伊」殺人行

中央公論社

目次

第一章　帰郷　7
第二章　寝台特急「紀伊」　35
第三章　法然寺　72
第四章　吊橋　118
第五章　列車編成の謎　147
第六章　上田城警察署　184
第七章　九年目の帰郷　231
第八章　特急「あさしお8号」　253
第九章　支配者　281
第十章　崩壊　314
解説　郷原宏　340

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

DTP制作　オフィス・トイ

寝台特急「紀伊」殺人行

第一章　帰　郷

1

中西明は、故郷の南紀を出て、十年目に、相ついで、父と母を失った。

彼の二十七歳の時である。

父は、まだ五十九歳、母は、五十歳になったばかりだった。いずれも病死だが、病死させた責任の大半は、自分にあると、中西は、思っている。

中西は、紀ノ川の上流、高野山に近い上田城という町で生れた。人口六千人足らずの町である。紀ノ川の清流が、町の近くを流れていた。豊かさと、貧しさが同居していた。豊かすぎるほどの自然があった。川魚の群れる川があり、緑の濃い山があった。しかし、耕地は少なく、といって、工業もなく、農業と林業を兼ねている家が、ほとんどである。

それでも、この町に生れた人々は、めったに、他所へ出て行かなかったし、関西方面

へ出て行った若者たちも、いつの間にか、帰って来る。そんな良さを持つ町でもあった。

中西の家は、この静かな町で、代々、旅館をやってきていた。高野山に近いため、参詣の人たちが、中西の旅館に泊り、参詣をすませたあと、湯泉地温泉や、竜神温泉などに、遊んだらしい。

中西の両親も、また、旅館の主人として、この上田城の町で、一生を終るつもりだった。

それが、先祖代々の町を捨てて、東京へ出なければならなかったのは、一人息子の中西が、事件を起こしたからである。

中西が、高校三年、十七歳の時だった。

その時、中西は、大学を目ざして、受験勉強に追われていた。高校の成績は、常に、三番以内で、両親からも、周囲からも、期待されていたから、それだけ、苦しくもあった。

中西は、もともと、神経の細かい方だった。といっても、それは、いいわけにはならない。

九月上旬の暑い日だった。いや、正確に日時も覚えている。九月十日の朝七時頃である。

連日の受験勉強に疲れた中西は、この日、自転車で、朝早く家を出て、高野山に行っ

た。

高野山の深い木立ちの道を歩いて、頭を、からっぽにしたかったのである。

まだ、参拝の人の姿は、ほとんどなかった。一ノ橋の袂で自転車をおりて、中西は、奥の院の方へ歩いて行った。

風が無くて、暑かったのは、はっきり覚えている。行く夏を惜しむように、朝から、蟬が、猛烈に、鳴いていた。

その時、彼女に出会ったのである。

あとになって、同じ上田城の女性とわかったが、その時は、名前も知らなかった。

薄い夏のドレスを、身体にからませるようにして、女は、中西に向って歩いて来た。ドレスを通してでも、胸の豊かさがわかるような女だった。

最初は、「きれいな女だな」と思ったが、それだけだった。だが、次第に、距離が近づいてくるにつれて、なぜか、中西は、息苦しくなってきた。

女は、変に、ゆっくりと歩いてくる。そして、ちらちらと、挑むように、中西を見る。いや、そう見えただけなのかも知れない。五、六メートルまで近づいたとき、突然、中西は、身内に、激しい衝動を感じた。

気がついた時は、その女を、杉木立ちの奥で押し倒していた。女の喘ぐ声と、めくれあがった白いスカートが、そのあと、何日も、目先にちらついて離れなかった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

暴行のあと、中西は、ひたすら、逃げた。
自転車を、一ノ橋に置き捨てて、走り続けて、家に戻った。
すぐにも、警察が捕まえに来るかと思い、中西は、戦々恐々としていたのだが、なぜか、夜になっても、警察は、やって来なかった。
警察が来たのは、翌日だった。
警察へ連れて行かれて、中西は、自分が暴行した女の名前が、浅井由美子であること、二十三歳で、役場の事務員をしていることを知らされた。
それだけではない。彼女が、昨日の夜おそく、死んだことも知らされたのである。
「浅井由美子は、今年の十月の末に、結婚することになっていたんだ。お前に暴行されて、彼女は、もう結婚できないと絶望して、自ら、命を絶ったんだぞ。お前のしたことが、一人の人間の命を絶ってしまったんだ。それを、よく考えてみろ！」
中年の浜村という刑事は、そういって、中西を睨んだ。
十七歳の中西は、未成年だということで、新聞には名前が出ず、浅井由美子の自殺は、中西の暴行が原因という確証もないままに、釈放された。
しかし、小さな町である。
すぐ、人々の噂になった。

2

昔気質（かたぎ）の両親には、いたたまれなかったに違いない。父親の方は、自殺も考えたらしかったが、死ぬ代りに、三代続いてきた旅館をやめ、ひっそりと、東京に引っ越した。父も母も、上田城の町以外で、生活したことはなかったから、東京での生活は、大変だった。

それでも、身を粉（こ）にして働き、いくらかの資金が出来ると、それを元手にして、紀州の郷土料理の小さな店を出した。そんなところにも、二人の南紀への想いが表われていたようである。

郷土料理の店は、成功だった。

中西自身も、一年浪人しただけで、M大に入り、無事卒業すると、新宿に本社のある東西商事に入社することが出来た。

両親は、東京で、一応、成功し、生活も安定したものの、南紀へ帰りたいという思いは、一日も消えなかった。

だが、律儀な性格で、息子の犯したことを自分の責任のように思い込んでいた両親は、どうしても、南紀の土を踏むことが出来ずにいた。そうなると、なおさら、故郷の町へ

の郷愁は、激しく高まっていたと思われる。
名古屋や、大阪へ、用があって行ったときなど、ちょっと足を伸ばせば、高野山にも、上田城の町にも行けるのを、父も、母も、じっと、望郷の思いを嚙み殺すようにして、東京へ戻ってきていた。
そうした辛さが、身体に悪かったのかも知れない。
中西が、二十七歳になってすぐ、父が、過労から床につくと、あっという間に、亡くなってしまった。父の最後の言葉は、自分の骨を、出来れば、故郷の上田城の町に埋めてくれというものだった。
父が亡くなると、それで、生きている張り合いを失ったのか、母も、続いて、病床につくようになり、母の方は、三か月寝たあと、肺炎をこじらせて、死んでしまった。
母は、何もいい残さなかったが、父と一緒に、郷里に埋葬されるのを願っていたに違いなかった。
その頃、中西自身は、上司の紹介で知り合った小沼真紀という二十四歳の女性と、婚約していた。
真紀は、東京の生れだが、本籍は、南紀の新宮だった。
中西自身は、それを偶然だと思っていたが、或いは、上司から、彼女の経歴をいわれたとき、新宮という地名を聞いて、無意識に魅かれたのかも知れない。中西も、両親ほ

どではなかったが、時にふれて、いつか、故郷の町へ帰ってみたいと思っていたからである。

母が亡くなった時、中西は、思い切って、上田城の町へ帰ってみようと思った。一家をあげて、故郷を捨てて東京へ出てから、すでに、十年がたっている。十年一昔という。中西の心の中の傷も、すでに、いえてきていた。

真紀に話すと、彼女も、両親の生れた新宮へ行ってみたいという。

七月二十五日から、中西は、四日間の休暇をとって、いよいよ、南紀へ行くことにした。

真紀より一日早く行き、翌日、新宮で、彼女を迎えるというスケジュールにしたのは、自分が、果して、快く故郷へ入れるかどうかわからなかったからである。

真紀には、何もかも話す中西だが、さすがに、十七歳の時の事件のことは、打ち明けてなかった。

いよいよ、行くことに決めると、中西は、やはり、なつかしさと同時に、不安も覚えた。

子供の頃、遊び廻った紀ノ川の土手や、山の景色が、しきりに、胸に浮ぶ一方で、十年たった今も、上田城の町の人たちは、その事件を忘れず、冷たい眼で迎えるのではないだろうかという不安がよぎるのだ。

東京のように、殺人事件が、毎日起きている町なら、十年前の暴行事件など、すぐ、忘れられてしまうだろう。しかし、あの小さな町では、事件は、めったに起きはしない。それだけに、怖いのだ。

中西は、高校時代の友人、工藤真一郎（くどうしんいちろう）に手紙を書いた。

工藤は、彼が、暴行事件を起こしたとわかってからも、親友としてつき合ってくれた唯一の友人だった。

中西が、東京へ逃げてからも、時々、手紙をくれていた。今は、あの町で、役場に勤めている筈（はず）だった。

中西は、手紙の中で、両親が、相ついで病死し、故郷の上田城に葬ってくれと頼まれたことを書いた。

返事は、すぐ来たが、それは、ひどく簡単なものだった。

〈手紙は、受け取った。

僕も、ぜひ、君に会いたい。

七月二十五日には、極楽橋（ごくらくばし）の駅へ迎えに行っている〉

この短さでは、工藤が、何をいいたいのかわからなかった。

会ってから、いろいろと話したいのだろうと、中西は解釈して、電話で問い合せることはしなかった。

3

二十五日は、朝から暑かった。長かった梅雨も、二十三日に明けていた。その前日まで、雨雲が重く低く空を覆い、終日、陰気な雨が降っていたのに、その夜、激しい豪雨があったかと思うと、二十三日から、雲一つない夏空が、東京の上空に広がるようになった。

中西は、その明るさが、自分の南紀行を祝福してくれているように思えた。

上田城の町の人たちも、きっと、もう、十年前の事件など、忘れてしまっているに違いない。中西は、トーストと牛乳、それに、玉子焼の簡単な朝食をとりながら、自分にいい聞かせた。

（こちらが、深刻に考えるほど、相手は、考えていないことが多いじゃないか。おれのことも、きっとそうだ）

六時に、明大前（めいだいまえ）にある自宅を出ると、中西は、新宿（しんじゅく）に出て、新宿からは、中央線の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com